

高き志【にころざし】

地域とともにある

勢いのある学校

No. 41(R2. 3. 16発行)文責 校長 福田雅也

あたり前の日々

このような状況の中で今年度最後の学校便りを発行することになるとは考えてもいませんでした。3月15日までの臨時休校が決定した時、急な決定でショックはありましたが、熊本や上益城の状況がこれ以上悪くならなければ、16日から1週間は、また授業ができる。あたり前の日々が戻る。と楽観的な考えを持っていました。しかし、全国的な状況は悪化の一途をたどり、国の要請や県からの通知により、11日に休校延長が決定されました。さらに、文部科学大臣は先日の記者会見で「休校終了の時期を検討する段階ではない」と発言し、WHOからはパンデミックの宣言が出されました。正に「先が見通せない」厳しい状況に直面してしまっているのです。

偶然にも休校延長が決定した3月11日は、9年前に東日本大震災が発生した日でした。私の中では、あの時に感じた感情と今回の状況で感じる感情がどこか重なっているように思えるのです。「こんなことが本当に起こるのか…」「目の前で起こっていることは夢ではないのか…」「映画の中の出来事ではないのか…」そんな感情です。

あの時も思ったことですが、新型コロナウイルスによる今の状況も早く収束し、あたり前の日々が戻ってきてほしい

上の言葉は、11日の夜たまたま見ていたニュースで、東日本大震災に関してのインタビューを受けた東北の方が答えられていた言葉です。この言葉を聞いて私は、漠然と感じていた自分の思いをずばり代弁してもらったように感じました。それは、上の言葉の中にもある「あたり前の日々が早く戻ってきてほしい」という強い願いです。さらに思い出されたのが、熊本地震後に身をもって感じた「あたり前の毎日の有難さ」や「あたり前の毎日はあたり前ではない」という事実。これらも、今回の状況で感じる感情と重なるのだと思います。

今、一番申し訳ないと思うのは、卒業を目前にした6年生に対してです。6年生は、私と一緒に過ごしたこの一年間、学校のリーダーとして様々な場面で下級生をリードし、高木小を盛り上げてくれました。学校の顔として様々なところで活躍してくれました。そして、私にとって自慢の6年生に成長してくれたのです。そんな6年生は、本来ならこの時期に、卒業制作や卒業文集作り、卒業式の練習と忙しい中、「ピザ体験教室」や「サンキューパーティー」等、楽しい行事もたくさん予定され、充実した毎日を過ごしているはずだったのです。卒業で離れ離れになる友達もいて、最後にたくさん一緒に遊んだり、話したりもしたかったことだと思います。それらが全くできなくなったのです。さらに、卒業式はできるものの、会場には在校生や来賓の方々の姿がないのです。たくさんの方々にとくさんの祝福をもらえるはずだったのに。本当に申し訳ないと思います。

しかし、今回の経験はきっと何かの意味があるのだと思います。少なくとも言えることは、次に迎える卒業の日、その日が「あたり前に来た日ではない」と思えるだろうということです。そのことは、きっと周りの方々への感謝につながるにちがいないとも思います。そしてその時、今回のことを思い出して「そんなこともあったねー。」と笑って話してくれていればいいな、と心から願っているところです。

